

ミンネと宮廷的名誉

ゴットフリートの『トリスタン』における リヴァリーンとブランシェフルールの場合について

田 中 一 嘉

序

13世紀初頭に成立したゴットフリート・フォン・シュトラースブルク (Gottfried von Straßburg) の『トリスタン (Tristan)』¹は、およそ2000行にも及ぶ一大叙事詩である。この詩作は未完ではあるが、これまでの中世研究において、作品の様式的 (詩学的・修辭学的) 側面における詩人の芸術性に対しては異口同音に高い評価がなされている。その一方で、トリスタンとイゾルデの「恋物語 (senemaere)」(v. 211) の道徳的側面に眼を向けると、『トリスタン』に描かれている内容 (物語) が一様に肯定的に受け入れられているとは言い難いのである。なぜなら、彼らの関係は紛れもなく姦通の関係だからである。それ故に、彼らの「ミンネ (minne)」²は、如何にして宮廷的な「名誉 (êre)」と相容れたのか、あるいは相克したのが問題となる。ゴットフリートは、自身によってプロローグ (v. 1-244) においてミンネと名誉との関係を以下のように述べている：

愛 (liebe) は祝福されたものであり、
人を幸せにする努力であって、
誰しもこの愛の教えなしには
美德 (tugende) も名誉 (êre) も得ることはないのだ。
愛は多くの誉れある人生をもたらし、
こんなにも多くの美德が愛によってもたらされるのである (v. 187-192)

この箇所においてミンネと名誉の関係性は、一見、明確に示されているように見えるが、しかし、この関係性に関しては様々な相対する研究諸説が

ある。これまでの先行研究では大きく分けて、宮廷社会における（理想的な）ミンネの実現とその共同体に根ざした伝統や諸価値観（法や名誉）との間には妥協し難い対立・矛盾が生じているという見解³がある一方で、宮廷社会においてミンネと名誉は相反することなく調和しているという見解がある⁴。さらに、ミンネを一種の擬似宗教の高みまで引き上げる、いわば「恋愛至上主義」的な見解もあるが⁵、この解釈には時としてキリスト教の価値が切り下げられるか、共同体秩序がネガティブに捉えられる傾向を孕んでいる⁶。

これらの見解はトリスタンとイゾルデのミンネを中心とした考察から導き出されたものであるが、その際多くの研究において、物語の筋といわゆる「付論（Exkurse）」⁷との整合性について議論されている⁸。この観点からの研究が膨大な数に上るのに対して、トリスタンとイゾルデ二人の関係が、彼ら以外の登場人物、すなわち、トリスタンの両親であるリヴァリーンとブランシェフルール、イゾルデの両親グルムーンと王妃イゾルデ、さらにイゾルデとマルケ王、トリスタンと白い手のイゾルデの四組との関連性の中で語られることがほとんどなかった。『トリスタン』全体のミンネを考察する際、トリスタンとイゾルデの関係と付論との関連性のみならず、この四組におけるミンネの様相との対比を通じて、トリスタンとイゾルデのミンネを分析する必要がある。とりわけプロローグ直後に語られるリヴァリーンとブランシェフルールの物語、いわゆる「前史（Vorgeschichte）」（v. 245-1790）は、作品の構成面かつ内容的な連関において他の三組とは一線を画していると言える。なぜなら、リヴァリーンとブランシェフルール以外の三組がトリスタンの物語である「本史（Hauptgeschichte）」に組み込まれているのに対して、この前史は独立した一つの物語として見ることができ、さらにその内容は出会い、結婚、死というミンネの始まりから完結までを描いたひとつの恋物語でもあるからである。また、「トリスタン物語」の伝承サイクルにおける考察では、ノルウェーの修道僧ロベルトが（ゴットフリート同様）ブリタニアのトマの版を翻案した『トリストラム・サガ（*Tristrams Saga ok Ísondar*）」（1226年成立）とゴットフリート版『トリスタン』との間で前史についての記述に内容的相違が見られる一方で⁹、K. Ruhが指摘しているように「ゴットフリート、おそらくすでにトマも、両親〔リヴァリーンとブランシェフルール〕のミンネと運命を意

識的にトリスタンとイゾルデのミネと運命に重ね合わせていた」¹⁰と考えることもできる。すなわち、ゴットフリートは、前史を単なるトリスタンの出生というエピソードに焦点を当てて描いたのではなく、この前史をトリスタンとイゾルデの恋物語のいわゆる縮図のようなものとして示唆的にプロローグの直後に配置していた、そして本史において壮大に展開する物語の根底に脈々と流れるミネ観を前史にも忍ばせていたと考えることも可能なのである。このように前史が『トリスタン』全体において非常に重要な位置を占めていることは明らかであり、リヴァリーンとブランシェフルールの物語を、プロローグで示されたミネと名誉の関連性の観点から分析することによって、トリスタンとイゾルデのミネ解釈に新たな可能性を見出せるのではないかという問題意識から本稿は出発している。ただし、A. Wolf が彼のトリスタン研究において展開しているような、トリスタンとイゾルデ、リヴァリーンとブランシェフルールのそれぞれの人物像の比較、本史と前史の対比は魅力的なテーマではあるが¹¹、本稿ではそこには立ち入らず、プロローグと前史との関連性を明確にすることを第一の目的としている。

1. リヴァリーンとブランシェフルールのミネ

心からの喜び (*inneclîche liebe*) を有する者は、
たとえ心からの苦しみ (*wê von herzen*) を受けようとも、
しかしながらその心は常にそこに留まっているものである。
心から愛する気持ち (*der inneclîche minnen muot*)
その者の憧れの苦悩の内
燃えれば燃えるほど
その者はより一層愛する (*minnet*) ものである。
この苦悩 (*leit*) は喜び (*liebe[s]*) に満ちており、
この災い (*daz übel*) は心に幸福をもたらす (*herzewol*) が故に、
高貴な心を持つ者は誰でも一旦これに魅せられたら、
これなしではいられないのである。 (v. 108-118)

プロローグにおいてすでに「ミネは、苦悩に満ちた喜び、喜びに満ちた苦悩であり、実存の基本カテゴリー (die existentielle Grundkategorie) である」¹² ことがゴットフリートによって肯定的に示されている。そしてゴットフリートは、恋人たちの現存在の仕方としての喜びと苦悩という幾分抽象的なミネ観をリヴァリーンとブランシェフルールの二人によって具体的に例示しているのである。

まず二人の出会いは、マルケ王の主催した騎士競技の場面で訪れる。この場面は、ミネザングにしばしば見られる美しく色鮮やかな草花、心躍らす鳥たちのさえずりといった初夏の生命力に溢れた自然の描写を伴っている (v. 536-586)。この「甘美な5月 (süeze meie)」(v. 539) の描写と並んで、ブランシェフルールの「驚異的な美しさ」(v. 632) が男性たちにとっての「喜ばしい眼の楽しみ (diu saelige ougenweide)」(v. 641) であったと語られている。リヴァリーンの場合も同様に、その場に居合わせた婦人達は彼の逞しい容姿を以下のように誉めそやしている：

あのかたの身体はまったく非の打ちどころがありませんわ！
あのかたの堂々たる脚は
なんと均整がとれていることでしょう！
あのかたの楯はいつも
あるべきところにあるのです！
槍の柄はあのかたの手になんと似つかわしいことでしょう！
あのかたの衣服のすべての素晴らしいこと！
あのかたの頭と髪の毛といったらどうでしょう！
あのかたの振る舞いのすべてはなんと甘美なものでしょう！
あのかたの身体のなんと喜ばしいこと！
ああ、あのかたと喜びを共にする女性がいたとしたら、
彼女はなんて幸せな女性でしょう！ (v. 708-719)

このような二人の美しく端整な容姿の描写と、二人に出会いの場を提供した自然の描写は、二人の恋に肉欲的・官能的な印象を与えている。確かに、ミネという現象において、男女を惹き入れる入口としての外面的美という官能性の要素は否定できない。しかし、彼らは単に視覚的・官能的な要

因によってのみミンネの状態に陥ったわけではない。ミンネの官能性を「喜び」と解するならば、その対となる「苦悩」が必ずその背後に潜んでいるのが『トリスタン』におけるミンネである。ゴットフリートはプロローグにおいて、「苦悩を耐え忍ぶことのできない、ただ喜びの中にのみ生きていたいと思うような取るに足らない人々」(v. 50ff)のことを批判しているが、リヴァリーンとブランシェフルールはこの例には当てはまらない。なぜなら、彼らのミンネには苦悩が常に付きまとっているからである。彼らのミンネを理解するには、この苦悩の本質を理解することが必要である。

リヴァリーンとブランシェフルールは、騎士競技の場での出会いを経て、各々の心の中で幾度となく「期待と疑念」(v. 881)との間をさまようことになるが、この過程をゴットフリートは「鳥もち」のモチーフ(v. 841-914)によって説明している：

彼 [リヴァリーン] がもがけばもがくほど、
ミンネはより一層力強く [彼を] 押し留める。
彼が必死に逃れようとすればするほど、
ミンネはより一層の力を以って [彼を] 引き戻す。 (v. 903-906)

心の中で揺れ動く思考と感情の葛藤という苦しみを体験せずして「真なるミンネ (*rehte minne*)」(v. 929)の認識には至らない。彼らのミンネは、もはや肉体的快楽だけを求めた関係や、一時の感情に流されたような情事¹³ではない。むしろ彼らは「心の王国において (*in ir herzen künicrîche*)」(v. 728; 810; 815)¹⁴深く結ばれているのである。このような心における二者合一の理念は、喜びと苦しみのモチーフと並んで、プロローグおよび前史において繰り返し用いられており¹⁵、ゴットフリートのミンネ観の中核を成すものである。それ故に、リヴァリーンとブランシェフルールは、この理念の下、心の奥底でつながった相思相愛の「清い恋 (*reine liebe / sene*)」(v. 96; 127)を体現しているのであり、互いの「清い誠実さ (*reine triuwe*)」(v. 178; 231)を示していると言える。

そして、ミンネが成就した二人は新たな局面を迎える。そこでは、ミンネにおける苦悩のもうひとつの側面が頭をもたげてくる。それはすなわち、

恋人への憧れによる苦しみだけでなく、宮廷という共同体との関わりにおいて彼らに襲い掛かってくる幾重もの苦難を乗り越えんがために生ずる苦悩である。

2. ミンネと宮廷的名誉

リヴァリーンとブランシェフルールが宮廷社会に生きる人間である以上、彼らは共同体における構成員としての望ましい立ち居振る舞いの規範を無視するわけにはいかない。宮廷に生きる人々がこの規範を実践することによって、その人に名誉が授けられるのである。この名誉は、その人の所有する「美德 (*tugende*)」が公に称賛されることによって得られるもの、すなわち、個人に対する共同体の肯定的な承認である。K. Morsch は、この作品に描かれている人々は「宮廷文化の活力のない、硬直した伝統と共に生きている」と述べており、共同体における(伝統的)価値基準をマイナス視している¹⁶。しかし、名誉は宮廷的なものの精神性を顕在化したものであり、宮廷における生の実践を前提としているのである。共同体における名誉、共同体から授かる名誉が如何に重要であるかは、リヴァリーンとブランシェフルールが「宮廷的な理想像の典型 (Prototyp[en])」¹⁷として描かれていることが証明している。

宮廷人として称賛される素養は男女の性差によってその特徴が大きく分かれるが、まずリヴァリーンについて見ると、彼はパルメニーエの年若き主で (v. 245f.)、身体的にも宮廷的美徳においても欠けるところのない誉れ高き人物として描かれている (v. 251-261)。宮廷男性に必要な素養は何よりもまず戦士としての「勇敢さ (*manheit*)」であり、労を惜しまずに行動する心意気である¹⁸。リヴァリーンは自国におけるモルガン公との争い、そしてマルケ王の催した騎士競技においてその身体的・戦士的实力を遺憾なく発揮している。また、リヴァリーンは、マルケ王が他国から攻撃を受けた際、マルケ王側の一人としてすすんで戦いに臨み、勝利に貢献して武勲を立てる。リヴァリーンはこの戦で瀕死の重傷を負ってしまったが、その彼を宮廷の皆が心から嘆き悲しんだ様子からも、リヴァリーンがマルケ王の共同体から大きな称賛を得ていたことが十分に窺える (v. 1143-1162)。

一方、ブランシェフルールは、マルケ王の宮廷においては随一の美しさを誇っており、「彼女を見た男性は、それ以後は女性と美德とを愛さずにはいられない」(v. 637ff.)と言われるほどであった。宮廷社会における女性的素養の本質は「美しさ (*schoene*)」と「礼節・教養 (*zuht*)」にあるが¹⁹、ブランシェフルールの場合、(外面的な)美しさが(内面の)優れた美德を反映していることが見て取れる。また、礼節・教養と並んで、宮廷女性が最も重視しなければならない徳目に「貞潔・純潔 (*kiusche; kiuscheheit*)」がある²⁰。貞潔・純潔とは、結婚するまで処女を守り通すこと、そして恋人や夫に対する精神的かつ肉体的な誠実さを示すことであり、男女の個人的な繋がりや規範が共同体における道德観念と密接に関連付けられている徳目である。ブランシェフルールは、瀕死の状態にある最愛のリヴァリーンに会うために、彼女の家庭教師の助言に従って乞食の姿に変装して彼に会いに行く (v. 1239-1286)。彼女はミンネの官能的で情熱的な力 (v. 1314ff.) によってリヴァリーンを死の淵から生還させたが、その代償としてリヴァリーンの子を身籠るという新たな苦悩を得る (v. 1308-1340)。ただし、「彼女の心、彼女の考え、そして彼女の焦がれる心は、偏にリヴァリーンにのみ向けられていた」(v. 1352ff.) のであり、「二人のいるところには、誠実な愛 (*léal amûr*) があった」(v. 1362) のである。このようにリヴァリーンへのミンネに対する彼女の「誠実さ (*triuwe; staete*)」²¹を疑う余地はない。しかし、結婚前の乙女が異性と恋仲になり、結婚前にすでに処女を失った上に身籠ってしまったこの事実は、マルケ王の宮廷にとっては不祥事であり²²、ミンネの情熱に身を委ねてしまったブランシェフルールのこの行為は、明らかに宮廷女性としての規範に抵触している。

リヴァリーンは死の淵から回復し、二人が幸せな時を過ごしていた矢先、パルメニーエがモルガン公に侵攻され、これに対抗すべくリヴァリーンが帰国の途に着こうとする。この出来事は、彼らの人生を大きく揺るがし、ミンネと宮廷的名誉との葛藤状態を先鋭化していく。リヴァリーンの暇乞いに対してブランシェフルールは、リヴァリーンの子供を身籠っていることを告白する。彼女は、もしマルケ王の宮廷で彼女が妊娠していることが発覚したら、兄王は彼女を殺害するか、あるいは勘当し宮廷から追放するであろうという不安を覗かせる (v. 1469-1486)。死を免れたとしても、宮廷から追放された場合、彼女は宮廷全体の不名誉と恥辱を背負ってもはや

「生ける屍同然の人生を送らねばならない」(v. 1506f.) と窮状を訴える。この歎き²³からも彼女にとって宮廷の名誉が如何に重要で大事なものであるかは明白である。

この歎きを受けてリヴァリーンは、「もしあなたが私のために何らかの苦難を被ったのならば、私のできうる限り、その苦難を取り除きましょう」(v. 1512f.) と言い、自身がコーンウォールに留まるか、彼女を連れてパルメニーエへ帰国するかという提案をし、その決断を彼女に委ねる(v. 1529-1544)。リヴァリーンがコーンウォールに留まったとしたら、それは統治者であるにもかかわらず自国の危機を救わなかったという不名誉となり、リヴァリーンも宮廷社会から誹りを受けることになる。その場合、ブランシェフルールの不安どおり、彼らは宮廷生活を捨ててミネのみに生きることを覚悟せねばならない²⁴。その一方で、共にパルメニーエへ連れ立つという提案では、ブランシェフルールはマルケ王の宮廷での生活を捨てることになるが、自分の許で全てを賭けて彼女の人生を支えていくというリヴァリーンの決意が語られている。これは；

苦しいことや喜ばしいこと、ひどいことや素晴らしいこと、
そしてあなたの身に起こるすべてのこと、
そのことから私は逃げたりはしません。
それがどんなに辛く悩ましいことになるうとも、
私はこれからもずっとそばに居ります (v. 1524-1528)

という彼の言葉どおり、彼のブランシェフルールへのミネに対する誠実さを表している。彼らはミネにおいて固く結ばれたことによって、喜びだけでなく、相手が被った苦悩さえも共に甘受することを厭わないのである。

ブランシェフルールの行動、リヴァリーンの提案は共にお互いに対する誠実さを示しており、彼らのミネは、ゴットフリートがプロローグで示したミネ観を見事に体現している。しかし、そのミネが彼らに試練を与える。その試練とは、宮廷における名誉を如何に保持するか、というものである。そして、最終的にブランシェフルールはパルメニーエへ出奔するという決断をする。この決断は彼女にとって「最善の解決策」(v. 1555)

なのである。なぜなら、彼女はこの選択によって彼女自身の名誉だけでなく、マルケ王の宮廷の名誉の損失を最小限にとどめることができると考えたからである²⁵。この場面は、理性を失わせるようなミンネの抗い難い方に囚われた二人の情景とは対照的に、彼らは冷静かつ適切な判断を下していると言える。彼らの決断は、保身のための単なる利己的で短絡的な判断によるものではなく、二人のミンネと彼らの属する宮廷秩序とをなんらかの形で維持できないかという模索の結果至った結論なのである。

3. ミンネと結婚

中世においても「結婚 (ê)」は男女を結び付けるひとつの制度として共同体の中で機能しており、それ故に結婚という制度は、名誉とも深い関係にある。なぜなら、結婚は共同体における一種の承認の型だからである。ここで、ある男女の間に生じたミンネが結婚によって承認されるか否か、換言すれば、ミンネと結婚は相容れるか、ミンネは結婚後も維持されるかという問いが生じる²⁶。トリスタンとイゾルデの恋愛関係が姦通であり、彼らのミンネは結婚を前提としていないことは自明のことである。このことから F. Urbanek は、『トリスタン』において「結婚がミンネの場として言及されている箇所がどこにもない」²⁷と指摘しているが、果たしてそうであろうか。リヴァリーンとブランシェフルールの結婚を考察することによって、ミンネと結婚、ミンネと名誉との関連性がより一層明確になるであろう。

『トリスタン』におけるミンネと結婚との相関関係について M. Todtenhaupt は、リヴァリーンとブランシェフルールの愛が *herzeliebe* (v. 919; 1170; 1217; 1387; 1432) という語によって頻繁に書き換えられている点に着目している²⁸。その上で M. Todtenhaupt は、イゾルデがマルケ王の *herzeliebe* の対象として描かれていること (v. 13756; 16518)、およびトリスタンとイゾルデの愛が *herzeliebe* と形容されていないことを挙げ、*herzeliebe* は婚姻関係 (もしくは結婚することがすでに明らかとなっている場合) におけるミンネを指し示すものであるとして、リヴァリーンとブランシェフルールのミンネと、トリスタンとイゾルデのミンネを本質的に異なるものとしている²⁹。しかし、M. Todtenhaupt は、プロローグにお

いてすでに *herzeliebe* が二箇所 (v. 185; 194) で用いられていることには言及していない。プロローグにおける *herzeliebe* がトリスタンとイゾルデのミンネを意味していないとなると、プロローグの内容自体が本史とはまったく異なる次元で書かれているということになるだろう³⁰。それ故に、*herzeliebe* という語の判定からだけでは、リヴァリーンとブランシェフルールのミンネが結婚を前提としていたものであるとは考えにくい。彼らのミンネが結婚を前提としていたというよりは、むしろブランシェフルールは、リヴァリーンの存在を意識し始めた時すでに、リヴァリーンとのミンネ、ひいては彼と婚姻を結ぶことに対してマルケ王の承認が得られないのではないかという予感を抱いているのである。このことは、「愚かで無分別な心」(v. 1045) が名誉を無視し、宮廷女性としての礼節の度を越えて「望むべきでないものをあまりにも多く求めすぎている」(v. 1048f.) というブランシェフルールの独白の内に垣間見えるのである。モルガン公の一家臣であるリヴァリーンと、大国イングランドを統べるマルケ王の妹という身分の差は、政治的・外交的視点から見れば、彼らの婚姻の障害となるであろうことは明白である³¹。

また、リヴァリーンがマルケ王の側に立ってすすんで参戦した場面では、ゴットフリートによってリヴァリーンの参戦に何ら動機付けがなされていない。彼の参戦は、「力には力を報いる」(v. 273) という彼の元来の気質がそうさせた、あるいは純粹に一騎士としての義務と騎士的名誉への欲求を満たすためであると考えられる。と同時に、彼の参戦は、思いを寄せていたブランシェフルールの国を守りたいという意思の表れであったとも考えられる。もしそうであるならば、この戦の折にリヴァリーンは戦争に参加した功績の報いとして、ブランシェフルールを娶りたいという意志をマルケ王に申し出る機会があったと考えられるが、実際彼は結婚を申し出てはいない。それは、リヴァリーンが「あまりにも心のはやるにまかせて自分の思うように生きようとする」(v. 262ff.) いわば「子供のような無鉄砲さ」(v. 301f.) という生来の性格上の欠点ゆえに、政治的外交能力、ひいては統治者としての資質を欠いてしまったためであると K. Morsch は指摘している³²。しかし、参戦の際にリヴァリーンが結婚を申し出なかったのは、彼が身分の差を埋めるための政治的な駆け引きとしての政略結婚をまったく念頭に置いていなかったからである。詳細な心理描写を怠らないゴット

フリートが、この場面を出来事の序列を記述するに徹していることが何よりの証拠である。この時リヴァリオンは、損得や後先のことを考えず、ただただ心から彼女を愛していただけなのである。ブランシェフルールにも同様のことが言える。ブランシェフルールは、この身分の差と貞潔・純潔の理念を意識していたにもかかわらず、リヴァリオンが鳥もちに絡めとられたように、ミンネの「魔法 (*daz zouber*)」(v. 1040) に囚われ、リヴァリオンへの恋心を抑えられずにいたのである (v. 1045-1076)。彼らは(最初に)ミンネと結婚という政治的な配慮とを結びつけて考えてはいなかったために、後に苦境に立たされたのであるが、これは彼らが打算的・政治的な意図によって二人の距離を縮めたのではなく、ミンネの力によって強く結ばれていることを如実に物語っているのである。このように、リヴァリオンとブランシェフルールの関係は、本来(トリスタンとイゾルデのような共同体から認められざる)婚姻外の男女関係であると言える。

そして、苦渋の決断の末、パルメニーエに辿り着いた二人は、忠義者ルーアルの提案 (v. 1623-1637) によって救われる。なぜなら、そこで初めて、彼らにとってミンネと結婚とが結びついたからである。ルーアルの助言に従って、彼らは戦に入る前にまず教会で正式に結婚した。教会で結婚を宣言したことによって(マルケ王の正式な承認は得てないにせよ)パルメニーエの地におけるブランシェフルールの宮廷的な地位と名誉は確保され (v. 1653ff.) 生まれてくる子供の法的な承認が得られたのである³³。その後、戦が無事終わった暁には、リヴァリオンの宮廷において「祝宴 (*hohgezît*)」(v. 1626) を開いて二人の結婚の公の承認を得る予定であった。そうすることによって、彼らの宮廷的名誉は完全に保持されるはずであった。ここでのルーアルの提案は確かに、宮廷的名誉を第一に考えたものであり、いわば「政治的な道理に迫られて」³⁴行われたものであるとも言える。しかし、ブランシェフルールと結婚することによって「あなた様 [リヴァリオン] の喜びとあなた様の幸運とがまさしく太陽のように高まるでしょう」(v. 1615f.) とルーアルが言っている様に、彼らの結婚はミンネを伴っていないわけではない。すなわち、ルーアルの助言は、宮廷的名誉と彼らのミンネ(の喜び)の双方をより高めるものなのである。リヴァリオンとブランシェフルールの場合、「恋愛関係の質は婚約を結ぶこととはまったく関係していない。(中略)それ故に結婚は愛を排除しないに

違いない」³⁵のであって、ミンネと宮廷的名誉との間に生じた宮廷人としての現存在の危機は（完全ではないが）結婚という形で解決を見ているのである。

4. ミンネと死

『トリスタン』においてミンネと死の連関は、プロローグ（v. 58-63; 119f.; 222-244）を含め、作品全体を通して幾度となく想起させられるテーマである。Fr. Maurer は「ミンネと名誉の衝突は最終的に不可避的な別離と死を導く」³⁶あるいは「両者 [ミンネと名誉] の衝突は必然的に破滅（Katastrophe）を導く」³⁷という見解を示しているが、リヴァリーンの死はもはやミンネと宮廷的名誉の衝突の結果訪れる破綻や破滅ではない。彼が死を迎え入れることになった戦いという場は、騎士あるいは支配者として生きる上で避けられないものであって、そこにはミンネと宮廷的名誉との衝突はないのである。彼の死に際して、確かに、彼の庇護の下にあった人々の希望、そして名声や名誉までもが打ち砕かれてしまったとあるが（v. 1761ff.）ゴットフリートが自国のために身を賭して戦った「彼の死は称賛に値する（*lobeliche*）」（v. 1765）と述べているように、彼の死は彼自身の宮廷的名誉の破綻などではないし、ましてや社会全体の破滅を意味してはいない。その上で、ゴットフリートはリヴァリーンの死に対して「気高い心を持つ人々（*edele herze*）のことを忘れるはずのない天に在します神よ、彼を守られますように！」（v. 1710f.）という弔辞を述べており、リヴァリーンは清いミンネに相応しい気高い心を持った人物³⁸の一人に列せられているのである。それ故に、リヴァリーンはミンネと名誉をその死に至るまで、一個の人間の内に調和せしめたのである。

一方、最愛の人を失ったブランシェフルールの悲しみ方は、涙さえ、悲嘆の嗚咽さえ出ないほどであり、彼女の心は石のようになり、もはや「彼女の舌、彼女の口、彼女の心、彼女の思い、これらすべてが死んでしまった」（v. 1739f.）のである。この悲しみ方は、リヴァリーンの瀕死の重傷を負ったときの悲しみ方³⁹とは明らかに違う。婦人が最愛の人を失った際、胸を打ち叩くあるいは気絶してしまうほど嘆く様は、同時代の他の作品にも多く見られるものであるが⁴⁰、石のようになってしまうほどの悲しみの

深さは、彼女のリヴァリーンに対するミンネの深さと誠実さを物語っている。そして彼女は4日間もの間苦しみに悶えた挙句、トリスタンを産み落としてそのまま帰らぬ人となってしまった。しかし彼女の死は、単にお産によるものではなく、(むしろイゾルデ同様⁴¹)最愛の者の死に対するあまりにも深い悲しみ故の死であり、リヴァリーンの訃報を知った時、彼女はすでに悲しみの内で死んでいたのである。ブランシェフルールの死を、ゴットフリートは「同情に値する (*erbermeeliche*)」(v. 1766)と語っている。なぜなら、パルメニーエの宮廷における(すべての人々の)名誉の担い手であるリヴァリーンの死によって、彼女はミンネの対象と宮廷的名誉の拠りどころを両方一緒に失ってしまったからである。その上でゴットフリートが「この清いご婦人に神が恵みを賜れるように望まれよ」(v. 1784f.)と弔辞を述べているように、彼女のミンネもまた称賛されるに値するものなのである。それ故にブランシェフルールの死もまた、ミンネと宮廷的名誉の衝突によって陥った破滅でもなければ、宮廷的名誉に対するミンネの勝利などでもない。

リヴァリーンとブランシェフルール、彼らは宮廷生活における名誉の危機に瀕した際も、ミンネの誠実さによってこれを乗り越えてきたのである。彼らが死を迎え入れた要因は異なるが、彼らの死は、その最期まで宮廷人として誉れ高く生きたからこそ至った最終的な結末であり、二人の間に共通して清いミンネが深く息づいていたが故の結末なのである。

結論

『トリスタン』におけるミンネと名誉との関連性は、宮廷社会に生きる個人と社会との関わりあいを示す縮図のようなものでもある。ゴットフリートはプロローグにおいてミンネと名誉の関係について以下のようにも述べている：

愛 (*liebe*) によって苦悩が生じなかった者で、
愛によって喜びが生じた者はいない。
喜びと苦悩は常に
ミンネにおいては分かち難いものであった。

人はこの二つのものと共に

名誉と称賛 (*ère unde lop*) を手に入れるであろう、

もしくはそれらなしに滅びねばならぬ。 (v. 204-210)

リヴァリーンとブランシェフルールは、ここで語られている愛ゆえの喜びと苦しみ、すなわち清いミンネを見事に体現した高貴な恋人たちであると言える⁴²。それ故に彼らは、死ぬまで変わることのない誠実なるミンネと宮廷的な名誉とを同時に得ることができたのである。確かに「愛の理想性と社会的伝統における価値と規範との衝突」⁴³が大きな苦難としてリヴァリーンとブランシェフルールの眼前に迫りはしたが、その際、彼らにとっては、「あれかこれか」というようなミンネと共同体の諸価値観との二者択一が問題となっていたのではない。パルメニーエへ出奔するというブランシェフルールの決断は、「世俗の法と伝統の圧力に対抗する力、政治的な生活の不自由さから逃れる [ミンネの] 力」⁴⁴が働いたわけでも、ミンネと名誉とを天秤に掛けた結果生じた妥協の産物でもなく、むしろ宮廷人としての最善の道を模索した末に至った決断である。また、彼らのミンネが「攻撃的な騎士道 [精神] と宮廷的な皮相性に対するエロスの完全なる勝利」⁴⁵を意味しているわけでもない。彼らにとってミンネと宮廷的な名誉は、いずれも同等の価値を有し、重要なものである。すなわち、「ゴットフリートは、ミンネの倫理観と社会的モラルとの間に優劣をつけたり、どちらか一方に他方を従属させたりしようとしたのではなく、追求するに値する理想として最終的に両者の価値観を統合できると確信を持っていたに違いない」⁴⁶という R. Schnell の洞察が、リヴァリーンとブランシェフルールの物語によって見事に実現されているのである。そして、彼らのミンネは彼ら自身の死によって幕が下ろされる。リヴァリーンはブランシェフルールへのミンネを貫き通したまま、不運の戦死を遂げてしまう。ブランシェフルールは、リヴァリーンの死に対する悲しみによって死を迎え入れる。

ミンネは時として宮廷的な名誉と反目する瞬間もあるが、当事者たちの振る舞いによって、その反目を調和へと変えることが可能である。ミンネと名誉の関係は、常に矛盾するアンビバレントな要素、あるいは(相互補完的に)調和の内にある常に固定化された関係ではなく、時には相克し、時には調和へと至るという流動的な関連性の内にあり、リヴァリーンとブラ

ンシェフルールはミンネと名誉の相克と調和という危ういバランスの上を歩いているのである。それ故に、ゴットフリートが謂わんとしていることは、ミンネと名誉とが対立するか、調和するか、ということではなく、清いミンネと共同体における名誉との間に生じた問題を（回避ではなく）解決しようとする努力は、如何なるものであれ、真に恋する者の心を打ち、称賛するに値するということである：

今日においてもなお我々にとって心地好く、
甘美でいつも新鮮に映るものとは、
彼らの⁴⁷心からなる誠実さ、
彼らの喜び、彼らの苦悩、

彼らの幸運、彼らの苦難 [の物語を聞くこと] である。

(v. 218-221)

リヴァリーンとブランシェフルールのように、恋人への一途な想いと、宮廷的名誉を重んじる姿勢、そのふたつがひとつの心に宿ってこそ後代にまで語り継がれるに値するミンネとなる。この詩作は、この詩作の受け取り手に対してミンネとは何かという問いを投げかけているだけでなく、どの時代、どの地域に生きる人々にとっても、恋愛における個人と社会との関わり方はどのようにあるべきかという問いを常に惹起させるものである。それ故に、リヴァリーンとブランシェフルールの生と死も誉れ高き恋物語として永遠に生き続け、「気高い心を持ったすべての人々にとっての糧 (*aller edelen herzen brôt*)」(v. 233) となるのである。トリスタンは、後にルーアルから自分の出生の秘密と両親の人生を知ることになるが (v. 4171-4261)、リヴァリーンとブランシェフルールの物語はまだ若いトリスタンにとっても生きる者の糧となったに違いない。清いミンネを体現した恋人たちの死は、ミンネの終わりではなく、新たなミンネの始まりでもある。それ故に、『トリスタン』においてリヴァリーンとブランシェフルールの体現した清いミンネは、トリスタンとイゾルデのミンネにも受け継がれて行くのではなからうか。

注

- ¹ 使用テキスト：Gottfried von Straßburg: Tristan. Nach dem Text von Friedrich Ranke neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn. 3 Bde. Stuttgart 2005.
- ² 中高ドイツ語 *minne* は、現代ドイツ語の *Liebe* に相当するが、現代には実用語として継承されていない語である。それ故に本稿では、中世における独特の恋愛観・恋愛様式を意味するために、*minne* の訳語をカタカナ「ミンネ」と表記している。また、ゴットフリートは作中、「愛・恋愛」を意味する名詞として *minne* と *liebe* および *sene* を意味上では明確には使い分けていない。とりわけ *liebe* は、文脈上第一義の「喜び」という意味だけでなく、*minne* の同義語として「愛・恋愛」という意味で用いられている場合が多い。*sene* も同様に、第一義の「憧れ」の意味以外に「愛・恋愛」の意味で頻りに用いられている。本稿では *liebe* および *sene* が *minne* と同義で用いられていると思われる場合は「愛・恋愛」、動詞 *minnen* / *lieben* / *senen* を「愛する・恋する」と訳し、適宜、原語を括弧に入れて表記した。
- ³ Vgl. Friedrich Maurer: Leid. Studien zur Bedeutungs- und Problemgeschichte in der großen Epen der staufischen Zeit, Bern 1951 (Veerte Auflage 1969); Dietmar Mieth: Dichtung, Glaube und Moral. Studien zur Begründung einer narrativen Ethik, Mainz 1976; Klaus Morsch: *schoene daz ist hoene*. Studien zum Tristan Gottfrieds von Straßburg, Erlangen 1984; Walter Haug: Gottfrieds von Straßburg >Tristan<. Sexueller Sündenfall oder erotische Utopie. In: Strukturen als Schlüssel zur Welt. Kleine Schriften zur Erzählliteratur des Mittelalters. Hrsg. von Walter Haug, Tübingen 1989, S. 600-611.
- ⁴ Vgl. Tomas Tomasek: Die Utopie im >Tristan< Gottfrieds von Straßburg, Tübingen 1985; Christoph Huber: Gottfried von Straßburg, Tristan und Isolde. München 1986.
- ⁵ Fr. Ranke は「ミンネの洞窟」(v. 16679-17274) の場面解釈で、トリスタンとイゾルデの愛の住みかとしての洞窟が、教会建築に対する聖書の道徳的解釈と神秘主義的解釈の類型に従って形作られていると考え、ゴットフリートの構想しているミンネはいわば「愛の宗教」であると解釈している (Friedrich Ranke: Tristan und Isold. München 1925, S. 11f.)。H. de Boor もまた、この作品を「ミンネの聖者伝」と見做している (Helmut de Boor: Die Grundauffassung von Gottfrieds Tristan. In: DVjs 18 (1940), S. 262-306, hier S. 276.)。その他にも以下の文献を参照：Bodo Mergell: Ausdruck der Frömmigkeit des Zeitalters. 1949; Petrus W. Tax: Wort, Sinnbild, Zahl im Tristanroman, Berlin 1961 (Zweite Auflage 1971)。
- ⁶ J. Schwietering は「神明裁判」(v. 15047-15764) の解釈において「神はミンネの道具に成り下がっている」と見做し、神の価値を切り下げることによって、ミンネの価値を昇華させている (Julius Schwietering: Mystik und höfische Dichtung im

Hochmittelalter. Tübingen 1960, S. 190f.)。また、G. Weber は、ミンネを実存的 (人間中心的) 見地から考察することによって、ミンネをあらゆる規範や共同体そのものを危機に晒す「超自然的な力 (das Dämonische)」と見做している (Gottfried Weber: Gottfrieds von Straßburg Tristan und Krise des hochmittelalterlichen Weltbildes um 1200, 2. Bde., Stuttgart 1953)

- 7 物語の筋とは、まさしくトリスタンとイゾルデの物語を意味しているが、『トリスタン』研究において、彼らが生きた虚構としての宮廷世界が、当時の実社会における伝統・慣習をどの程度反映していたのかが問題となる。その際、虚構の世界と現実の世界をつなぐ手がかりとなるのが (プロローグを含め) 作中の至るところに織り込まれた「付論」であり、そこではゴットフリート独自のミンネ観や世界観・人間観が展開されており、註釈書的な役割を担っている。
- 8 本稿は物語の筋と付論との関連性についての考察を行うものではないので、先行研究の個々の研究における論点についての記述は省略した。なお、付論に関する先行研究を概観するにあたり Rüdiger Schnell: Suche nach Wahrheit. Gottfrieds "Tristan und Isold" als erkenntniskritischer Roman, Tübingen 1992; Patrizia Mazzadi: Autorreflexionen zur Rezeption: Prolog und Exkurse in Gottfrieds 'Tristan'. Trieste 2000 を参照した。
- 9 Silveria Konecny: Die Eheformen in den Tristanroman des Mittelalters. In: PBB 99 (1978), S. 182-215, bes. S. 186-197.
- 10 Kurt Ruh: Höfische Epik des deutschen Mittelalters, Bd. 2, Berlin 1980, S. 231. Fr. Maurer も同じ立場を取っている (Fr. Maurer: a. a. O. (Anm. 3), S. 212)
- 11 A. Wolf は、前史を本史の「ひな形 (Vorlage)」と見做し、本史はこの「ひな型」を「凌駕 (Überbietung)」して展開していくと解釈している (Vgl. Alois Wolf : Gottfried von Strassburg und die Mythe von Tristan und Isolde. Darmstadt 1989, S. 111-123 (D. II. 2.: Rivalin und Blanscheflur als *figurae* der Hauptgestalten des Tristanromans))
- 12 James F. Poag: Entzauberte Heilsmuster. Zur Vorgeschichte von Gottfrieds Tristan. In: Entzauberung der Welt. Deutsche Literatur 1200-1500. Hrsg. von James F. Poag und Thomas C. Fox, Tübingen 1989, S. 19-33, hier S. 26.
- 13 註22 参照。
- 14 別の箇所では、「彼らは心地好く幸せだったので、彼らの生活を天国 (*himeliche*) とさえ交換しようとはしなかっただろう」(v. 1370ff.) とも語られている。
- 15 Vgl. v. 58-63; 108-118; 183-186; 204-207; 211-227; 230-233; 806-823; 1073-1076; 1352-1372; 1430-1433; 1517-1521.
- 16 K. Morsch: a. a. O. (Anm. 3), S. 10. それ故に K. Morsch は、たとえ宮廷社会の (伝統的) 価値観を破壊するとしても、(姦通としての) ミンネを肯定的なものとして認めている。
- 17 Wolfgang Jupé: Die «List» im Tristanroman Gottfrieds von Straßburg. Intellektualität und Liebe oder die Suche nach dem Wesen der individuellen Existenz. Heidelberg 1976, S. 36.
- 18 Otfried Ehrismann: Ehre und Mut. Äventiure und Minne. München 1995, S.65-70

(*ère*: Die Norm des Adels), bes. S. 68.

- ¹⁹ Ebd., S. 68; Joachim Bumke: *Höfische Kultur. Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter*. München 1986 (11. Auflage 2005), S. 451-483.
- ²⁰ O. Ehrismann: a. a. O. (Anm. 18), S.118-121 (*kiusche*: Hof und Askese); J. Bumke: a. a.O. (Anm. 19), bes. S. 470 u. 481ff..
- ²¹ 「誠実さ」は、男女間における貞潔さと（ほぼ）同義語であると同時に、主従関係、あるいは神との関係においても求められる資質であり、あらゆる美徳の根底に深く根ざしている徳目である。
- ²² このことは、イゾルデが結婚前に純潔を失ってしまったことに対する羞恥心、あるいは不義の暴露に対する恐れを抱いていたことから、さらにトリスタンがモルガンと対峙する場でモルガンがリヴァリーンとブランシェフルールの関係を「情事 (*vriuntscaht*)」(v. 5402)と揶揄していることから理解できる。
- ²³ W. Jupé は、この告白を（彼女の知性的な能力に由来する）「策略 (List)」と見做しているが、告白という「彼女の行動性 (Aktivität) が行く先の一筋の道筋をこじ開けた」ことは間違いない (W. Jupé: a. a. O. (Anm. 17), S. 47)。
- ²⁴ トリスタンとイゾルデの場合、トリスタンが「ミンネの洞窟」のことを予め知っていたために (v. 16683-16688) そこでの理想的な状態 (パラダイスでありユートピア) が実現されているが、リヴァリーンとブランシェフルールの場合、このような場が前提とされてはいない。
- ²⁵ マルケ王が（いわば誘拐に等しい）ブランシェフルールの出奔に対して、リヴァリーン側に何ら対抗措置をとっていないことから、後のリヴァリーンとブランシェフルールの婚姻に対してマルケ王は暗黙の承認をしていたと理解することが可能である (Vgl. K. Morsch: a. a. O. (Anm. 3), S. 104f.)。
- ²⁶ この問いに対して、すでにフランス宮廷文学の世界では、アンドレアス・カベルラスの『愛について (*De amore*)』3巻本において結婚と恋愛 (アモール) は相容れないとの結論が下されている。このことは、とりわけ、第1巻第7章第7の対話におけるマリー・ド・シャンパーニュの書簡と、第2巻第7章のいわゆる「恋愛法廷」における裁定 (8、9、17) および同第8章における「アモールの掟31ヶ条」に明示されている。この裁定は興味深いが、ここでは『愛について』との比較考察には立ち入らないこととする。
- ²⁷ Ferdinand Urbanek: *Die drei Minne-Exkurse im 'Tristan' Gottfrieds von Straßburg*. In: *ZfdPh* 98 (1979), S. 344-371, hier S. 368.
- ²⁸ Martin Todtenhaupt: *Veritas amoris. Die "Tristan"-Konzeption Gottfrieds von Straßburg*. Frankfurt am Main 1992, S. 68-73. *herzeliebe* は「心からの愛」とも「心からの喜び」とも訳すことができ (註2参照) 文脈上でもどちらの意で解するかは判別が難しい。
- ²⁹ Ebd., S. 69.
- ³⁰ また、この他にも *herze*-との複合語として、「心からの喜び (*herzeliep*)」(v. 61; 232)、「心からの悩み (*herzesorgen*)」(v. 80)、「心からの苦惱 (*herzeclage*)」(v.

- 87) 「心から心地よい (*herzewol*)」(v. 116) 「心からの悲しみ (*herzeleit*)」(v. 186; 232) 「心からの幸福 (*herzewunne*)」(v. 213) が挙げられるが、これらの複合語にゴットフリートがそれぞれ固有の意味内容を持たせていたかどうかは議論の余地の残るところである。
- ³¹ Vgl. K. Morsch: a. a. O. (Anm. 3), S. 73f.
- ³² Ebd., S.102 u. 105.
- ³³ Rosemary Norah Combridge: Das Recht im ‘Tristan’ Gottfrieds von Straßburg. Berlin 1964, S. 31ff.; Rüdiger Schnell: Gottfrieds Tristan und die Institution der Ehe. In: ZfdPh 101 (1982), S. 334-369, hier S. 342 u. 344.
- ³⁴ K. Morsch: a.a. O. (Anm. 3), S. 76.
- ³⁵ R. Schnell: a. a. O. (Anm. 33), S. 344.
- ³⁶ Fr. Maurer: a. a. O. (Anm. 3), S. 232.
- ³⁷ Ebd. S. 254.
- ³⁸ プロローグにおいてゴットフリートは、「気高い心を持つ人々」(v. 47; 117; 121; 216) を「ありきたりな人々; 世間 (*ir aller werlde*)」(v. 49) と明確に区別しており (v. 45-63) 「気高さ (*edel* [e])」に特別の地位を与えている (Vgl. J. F. Poag: a. a. O. (Anm. 12), S. 25)。
- ³⁹ リヴァリーンが瀕死という知らせを聞いたとき彼女は千度も胸を打ち叩き (v. 1165-1178) 瀕死のリヴァリーンの姿を目の当たりにした時には気絶してしまう (v. 1298-1307) 。
- また、暇乞いの場面でも別れを告げられた悲しさのあまり気絶してしまう (v. 1426ff.)。
- ⁴⁰ 一例として、『ニーベルンゲンの歌』におけるジーフリートを暗殺されたクリエムヒルトの失神の場面 (NL St. 1009; 1066) 『パルチファル』におけるガハムレトを失ったヘルツェロイデの失神 (*Parzival* 108, 30-109, 17) が挙げられる。
- ⁴¹ 現在伝承されているゴットフリートの『トリスタン』の写本には、結末部が書写されておらず、ゴットフリートがどのような結末を用意していたかは不明である。一般に流布している、いわゆる「トリスタン物語」の結末は、トリスタンの死を知ったイゾルデは悲しみのあまり彼の遺骸の傍らでとこときれる、というものである。
- ⁴² Vgl. Alois Wolf: Die Klage der Blanscheflur. Zur Fehde zwischen Wolfram von Eschenbach und Gottfried von Strassbrug. In: ZfdPh 85 (1966), S. 66-82, hier S. 79; Ders.: a. a. O. (Anm. 11), S. 120; Uta Dreccoll: Tod in der Liebe – Liebe im Tod. Untersuchungen zu Wolframs *Titurel* und Gottfrieds *Tristan* in Wort und Bild. Frankfurt am Main 2000, S. 124.
- ⁴³ K. Morsch: a. a. O. (Anm. 3), S. 9.
- ⁴⁴ Ebd., S. 91.
- ⁴⁵ A. Wolf: a. a. O. (Anm. 11), S. 116. および、J. F. Poag: a. a. O. (Anm. 12), S. 24.
- ⁴⁶ R. Schnell: a. a. O. (Anm. 8), S.10.
- ⁴⁷ 所有代名詞 *ir* は、ここではトリスタンとイゾルデを指しているが、リヴァリーンとブランシェフルールに置き換えて考えることも可能であろう。